神様の愛と憐れみによる選び

創世記28章10～22節
2022年7月24日
松田 基子 師

私達は日曜毎に、こうして教会に集まり、天地万物の創造主、私達の命の与え主である神様を唯一、真の神様として崇め、礼拝を献げて信仰を告白しています。 私達は今、唯一、真の神様を知り、そのお方を信じる特権に与っています。 この事は当たり前の事ではありません。私達はその事に気付いているでしょうか。 確かに神様に出会うまでは、親や友人、知人の勧め、書物や情報を介して、教会に来、そこで聖書を学び、周りの信仰者に触れる事によって、私もこの神様を信じ、この神様に賭けて行こうと決断をしたでしょう。 しかし、そもそも神様を知ったという事が不思議ではありませんか。

それは私たちの力の及ばない神様の選びと、導きに依って成し遂げられてきた事なのです。聖書は、神様への信仰は、神様からの選びに基づいている事を告げています。 しかし、神様の選びは、人間の側になにか優れたものがあるというのではありません。 その事について、モーセは、イスラエルの選びについて、**申命記7章6節**から、

「あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。 主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。 あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。 ただ、あなたに対する主の愛のゆえに、あなたたちの先祖に誓われた誓いを守られたゆえに、主は力ある御手をもってあなたたちを導き出し、エジプトの王、ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである」

と言っています。

この様に神様の選びは、
『神様の主権の下、神様の御心の儘に、お選びになるのであって、私達人間は、創られた者としての分を弁え、そこに口を挟むことは許されていません。』
と、言うより、
『神様の選びに対して、自分が如何に応えて行くか』
が、問われているだけです。

神様の選びは不思議です。 人間的には欠け多く、何故この様な人物がと、思える者を、神様は選び、ご自身の選びに応えて生きるよう導き訓練されています。 今朝登場します、ヤコブの選びこそ、欠け多い私達の慰めであり、希望です。 ところで、神様の人類救済のためのアブラハムの選びは、その子イサクに受け継がれました。 さて、イサクの妻リベカは、双子を身ごもりました。 ところがこの兄弟は、母の胎内にいる時から、押し合うので、リベカは主の御心を尋ねました。 すると神様は、
創世記25章23節で、

「二つの国民があなたの胎内に宿っており、二つの民があなたの腹の内で分かれ争っている。 一つの民が他の民より強くなり、兄が弟に仕えるようになる」

と言われました。

愈々出産の時が来て、先に生まれて来た子は、赤くて毛深い体をしていたところから、毛深い者と言う意味で、エサウと名付け、弟はエサウのかかとを掴んでいたところから、かかとの語呂合わせによって、ヤコブと名付けられました。
そこには、かかとを掴んで攻撃すると言う意味が含まれていました。 二人は成長すると、エサウは巧みな狩人になり、イサクを喜ばせ、ヤコブは天幕の周りで働き、リベカを喜ばせました。
エサウは野山を駆け巡り、活発で細かいことに頓着しない、おおざっぱな性格に育ちました。
一方ヤコブは、計画的で利害に敏感な、ずる賢さをもった性格に成長しました。

イサクはエサウを愛し、リベカはヤコブを愛したと言うのは、何も対立したと言う意味ではなく、より親しかったと言う意味でしょう。 ヤコブは弟ながら、と言うより、弟なるが故に自分がアブラハム、イサクを祝福された神様の祝福を、受け継ぐ事が出来ない事を、諦める事は出来ませんでし

た。 ヤコブは如何にして、それを手に入れ得るかと、何時も機会を狙っていました。 計画を練り、考える事が好きなヤコブは、どうしたら兄エサウから、長子の権利を譲り受ける事ができるか、色々な工作を考え、常に備えていました。

すると或る日の事、ヤコブが煮物を作ったところに、エサウが疲れ切って、野原から帰って来ました。美味しい匂いは、エサウの空腹を更に掻き立てました。 エサウはヤコブに、30節から、

「お願いだ、その赤いもの、それを食べさせてほしい、わたしは疲れきっているのだ」

と頼みました。 するとヤコブは、これをチャンスとばかりに、

「まず、兄さんの長子の権利を譲って下さい」

と要求しました。

『他人の窮地につけ込むなんて、許せない』

と思うのですが、エサウは**創世記**25章32節で、

「ああ、もう死にそうだ。 長子の権利などどうでもよい」

と言い、愚かにも長子の権利を投げ捨てました。

神様はその言葉を聴いておられました。
この事は神様の祝福を受け継ぐ資格を自分から放棄した事でした。 **ヘブライ人への手紙、**12章16節に、

「だれであれ、ただ一杯の食物のために長子の権利を譲り渡したエサウのように、みだらな者や俗悪の者とならないように気を付けるべきです」

とあります。 母リベカは、二人の性格を良く知っていました。 エサウは物事に頓着せず、大らかでしたが、その性格は 自分がアブラハム、イサクの神様に忠実に仕える事の大切さを、自覚出来ていませんでした。

アブラハムは神様を信じる信仰の血筋を守る為に、僕をイサクの妻捜しに、自分の一族の許に遣わしました。 エサウは母リベカが何故遠くから嫁いで来たかを知っていた筈です。 しかし、彼にとって、そんな事は重要ではありませんでした。 エサウは土地の人、ヘト人の女性、2人を妻に迎え、その事は両親の悩みの種となりました。

『エサウは長子ながら、神様の祝福を受け継ぐ家系には相応しくない。 ヤコブによって守られるべきだ』

と判断したのは、リベカでした。 一方、イサクは年を取り、目が霞んで、見えなくなって来ました。羊飼いの仕事は、砂嵐などによって目を悪くし、失明する事もあるそうです。 イサクは自分の死を自覚して、自分の最後の努めであるアブラハムの神の祝福を、長子にしっかりと受け継がせる事にしました。

イサクは、長子エサウが祝福の継承者であることに何の疑いもありませんでした。 イサクはエサウを呼んで、

『死ぬ前に、好きな野の獲物の料理を食べて、わたし自身の祝福をお前に与えたい』

と言いました。 エサウは喜んで、獲物を仕留めに野に出かけて行きました。

ところがその会話を、陰で聞いていた人がいました。 母リベカです。 リベカは何故、夫イサクに、信仰的な判断を話し合えなかったのか、今日の私たちには疑問に感じるところですが、時代的に女性が家督について口を挟むことの出来る時代ではありませんでした。 しかし、リベカもまた、策略家です。 夫イサクを欺して、ヤコブを祝福させる計画を考えました。 その計画にヤコブが、

「お父さんがわたしに触れば、だましているのが分かります。 そうしたら、わたしは祝福どころか、反対に呪いを受けてしまいます」

と言うと、母リベカは、

「わたしの子よ。 その時には、お母さんがその呪いを引き受けます」

とまで言っています。 リベカは、

『神様の祝福を途絶えさせてはならない』

との思いがあったに違いありません。
ヤコブは母の言葉に従って、父イサクの許に行きました。 目の見えないイサクは何度も長子エサウであるかを確認しましたが、ヤコブはエサウになりすまして、神様の祝福を受け継ぎます。

その後に、エサウが帰ってきて、イサクの好物を整えてイサクの許にやって来ました。 イサクは愕然とします。 そして、

「お前の弟が来て、策略を使い、
お前の祝福を奪ってしまった」
と告げました。 エサウは悔しがり、
「彼をヤコブとは、よくも名付けたものだ。
これで二度も私の足をひっぱり、欺いた。
あの時は私の権利を奪い、今度は私の
祝福を奪ってしまった」
と言っています。 そしてエサウは、
「父の喪の日も遠くない。 その時が
来たら、必ず弟ヤコブを殺してやる」
と意気込みました。

エサウの思いを知った母リベカは、兄弟のこの危機を避けさせるために一計を案じ、夫イサクに、
『ヤコブをエサウの様に異郷の娘と結婚
させるのではなく、自分の兄の娘と結婚
させるために、パダン・アラムの兄の許に
旅立たせて欲しい』
と頼みました。 イサクもリベカの案に同意して、ヤコブを呼び寄せ、リベカの兄、ラバンの許に旅立たせました。

ヤコブは兄エサウの殺意を感じ取っていました。 自分は今、兄の顔を避けて遠くに逃げるより他、道はありません。 神様の祝福を奪い取りはしたものの、その肝心の祝福の土地から離れなければなりませんでした。 ヤコブはカナン地方の南部に位置するベール・シェバを出発して、ユーフラテス川の上流、ハラン地方に向かって約800キロの旅へと出発しました。 一日路は約35キロぐらいですが、神様の顕現を受けた場所は、更に遠く位置しています。 その日も陽が沈みました。 辺りは石灰岩の岩山です。 浸食によって、階段状になったものや、色々な形が見られました。

ヤコブは適当な所に寝場所を定めて、そこで一夜を過ごすことにしました。 ヤコブは羊飼いでした。 それまでに野宿の経験はありました。しかし、羊も羊飼い仲間も居ない、知らない土地で、たった一人、夜空を見上げたその心は、先行きの不安と、父と兄を欺した罪責感と孤独に苦しんでいました。 ヤコブは荒涼とした岩山の間で、石を一つ取って枕にして、その場所に横たわりました。 疲れ果てたヤコブは、そこで眠りに落ちました。 すると28章12節で、
「彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が
地に向かって伸びており、しかも、神の御使
い達が、それを登ったり降ったりしていた」
とあります。

なんと素晴らしい世界でしょう。 ヤコブの現実とは全く違った世界がそこにはありました。
『ヤコブは自分が、ずる賢い性格で、父を欺
し、兄を欺し、兄から殺意を抱かれる程のこと
をしてしまったことに、自分で自分が嫌になる
中で、自分は父の家を離れ、当然神様の祝
福は受けられない』
と思っていたことでしょう。 ところがこんな荒れ野で、神様の方から、天から地に向かって、階段を伸ばして下さり、神様の守りの徴である、神の御使い達が、登ったり降ったりしているではありませんか。それは神様の御心を与え、助けてくださる証明でした。

そんな素晴らしい世界の中に神様が立って言われました。
「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、
イサクの神、主である。 あなたが今横たわっ
ているこの土地を、あなたとあなたの子孫に
与える。 あなたの子孫は、大地の砂粒のよ
うに多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広
がって行くであろう。 地上の氏族は全て、
あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。
見よ、わたしはあなたと共にいる。 あなたが
何処へ行っても、わたしはあなたを守り、必
ずこの土地に連れ帰る。 わたしは、あなた
に約束したことを果たすまで、決して見捨て
ない。」
何と言う驚くべき言葉でしょうか。 ヤコブは自分の罪故に、
『神様に見捨てられた』
と思い込んでいたに違いありません。 人間の考えからするなら、見捨てられて当然であり、祝福のかけらも受ける資格はありません。

だのに何故、神様はヤコブを見捨てることなく、追い続け、守り続け、愛し続けられるのでしょうか。 その答えは私達には分かりません。 それ

は神様の主権、神様の自由です。 人間には分からないところに、神様の自由があり、神様がそういうお方であるからこそ、ヤコブの様なずる賢く、自己中心の人間であっても、神様を求める者を、神様は愛し、選んで下さるのです。
ローマの信徒への手紙、9章11節に、
「**その子供たちがまだ生まれもせず、**
良いことも悪いこともしていないのに、
『兄は弟に仕えるだろう』
とリベカに告げられました。
それは、自由な選びによる神の計画が
人の行いにはよらず、お召しになる方
によって進められるためでした。
『わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ』
と書いてある通りです」
とあります。

ヤコブは神様の自分への愛に驚きました。
16節に
「**ヤコブは眠りから覚めて言った。**
『まことに主がこの場所におられるのに、
わたしは知らなかった。』
そして、恐れおののいて言った。
『ここは、なんと畏れ多い場所だろう。
これはまさしく神の家である。
そうだ、ここは天の門だ』
と感歎の声をあげました。

ヤコブは神様が罪深い自分を愛し、見捨てず、何時も共にいて、天からの階段を伸ばし、助けと導き、守りを与えておられることに気付き、驚きと感謝に溢れました。 ヤコブは早速枕にしていた石を祈念碑として立て、油を注いで、その場所を、ベテル（神の家）と名付けました。
後代この地は聖所が置かれる場所となりました。
ヤコブも神様に感謝して、誓願を立てました。
20節に、
「**神がわたしと共におられ、わたしが歩む**
この旅路を守り、食べ物、着る物を与え、
無事に父の家に帰らせてくださり、
主がわたしの神となられるなら、わたしが
祈念碑として立てたこの石を神の家とし、
すべて、あなたがわたしに与えられるもの
の十分の一をささげます」
と誓いました。

人間の応答は、なんと乏しく、小さいことでしょう。それでも神様は選んだ故に、最後まで見捨てず、選びに相応しく訓練し、神様の愛の大きさをお与えになるのです。 アブラハムの祝福は、イエス・キリストによって成就しました。 神様はそれ以降、**エフェソの信徒への手紙**
1章3、4節に、記されている通り、
「**神は、わたしたちをキリストにおいて、**
天のあらゆる霊的な祝福で満たして
くださいました。 天地創造の前に、神は
わたしたちを愛して、御自分の前で
聖なる者、汚れのない者にしようと、
キリストにおいてお選びになりました」
とあります。

今や、**イエス・キリスト**を**信じる者**は、全て**神様の選びの中に入れられている**のです。 ヤコブの様にずる賢く、父や兄を欺した者であっても、**神様の真の祝福を求め、それをイエス・キリストに見出した者**を、神様は選び、何時も共にあり、神様に選ばれた者に**相応しく造り変え**、神様からの**使命を果たす者**へと、**成長させて下さる**のです。 私たちも自分に失望せず、イエス・キリストによる神様の選びを信じ、直すら**神様に従っていく人生**を歩ませて戴きましょう。

お祈りを致します
憐れみ深い天の父なる神様

ヤコブを愛し選ばれた神様は、今日イエス・キリストを信じる者を選び、キリスト者としての使命を与え、常に共にいて、助け導いて下さる事を感謝致します。あなた様以外に、真の祝福をお与え下さるお方は居ません。

真の祝福を見失う事なく、一途にご自身を信じ、従っていく者とならせてください。

尊い救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。